

## 吉蔵と北土三論師

平井俊榮

## 一序

中国の三論学は、本来は北土の長安において、五世紀はじめに鳩摩羅什による「三論」の伝訳によってその研究が始められたものであるが、学派としての成立は、斎末梁初の江南の地、撰山においてであった。中国の仏教が、南北という文化圏の相違によってその特徴を異にしていることは周知の通りで、北方の「習禅」と南方の「講経」、あるいは禅宗における「南頓北漸」など、その代表的なものである。僧朗が江南に三論を伝えた当時も「江南は盛んに成実を弘め、河北偏に毘曇を尚ぶ<sup>1</sup>」と、湛然が伝えているように、成実の勢力が盛んであり、僧朗にはじまる撰山三論学派というものは、この成実との思想的対立を通して自らの教義上の立場を明らかにするところから始まる訳である。しかし、湛然も「南宗は初め成実を弘め、後に三論を尚ぶ<sup>2</sup>」と称しているように、南

地という同じ風土における勢力の交代であったということは、否めない事実である。日本に伝承された中国の三論は、すべてこの撰山三論学派の系譜につらなる隋の嘉祥大師吉蔵によって大成された江南の三論学であるが、これとは別箇に、当然五世紀初頭に長安の羅什教団によって研究された三論学が、北地においても伝承されていたということは、十分予想されることである。このことを示唆するものとして、吉蔵の著作に「北土三論師」ということばがある。そこで三論学成立史上の一問題として、この吉蔵のいう「北土三論師」ということばについて、考察を加えたいと思う。ただし、前述のように、日本南都の三論は、すべて吉蔵を中心とするものばかりであったがために、吉蔵の属した撰山三論とは別に、北地の三論学を体系的に把握するということは、資料的にも不可能なことであるので、もうすこし狭い意味で、吉蔵の心証において、具体的に「北土三論師」ということばが、何を意味し

ていたのか、その点に限って考察をすすめたいと思う。

## 二 曇鸞と四論宗

前田慧雲博士は、その著『三論宗綱要』の中で、この吉蔵のいう「北土三論師」に言及して、江戸末期の文政（一八一八—三〇）の頃活躍した真言宗の学僧、山城国海印寺宜然房明道の『三論玄義玄談』の説を次のように紹介している。<sup>3)</sup>すなわち、

北土師者、根本北齊曇鸞大師、是也、鸞大師、始為三論宗時、逢魏菩提流支、伝觀無量壽經、以是盛講智論、立四論宗、智度論中三十八卷往生品、九十二卷淨仏国土品、成立末世人往生淨土義、以智論往生淨土、合觀無量壽經、於四論中成立淨土一門、故大師造論註及奉讚略論等也、其次道綽禪師相承、又法朗大師有二人弟子、一人即吉蔵在南海地、伝三論、一人即明勝法師、在北地、伝四論、其後展転、唐善導大師盛成、立四論宗義、というものである。これによると、北土の三論師の祖は曇鸞（四七六一—五四二）で、道綽（五六二—六四五）がこれを継承し、また同じころ法朗（五〇八—五八一）の弟子の二人のうち吉蔵（五四九—六二三）は南地にあって三論を伝えたのに対し、明勝法師は北地にあって四論を弘め、善導（六一三—六八一）がこれを相承したというのである。中国浄土宗の祖曇鸞が「四論」を学んだということは、『統高僧伝』の曇鸞伝に

内外経籍具陶文理、而於四論、仏性、弥所窮研、

とあって、よく知られた事実であるし、空観の思想が、曇鸞教学の骨子をなしていることは、周知の通りであるから、この明道の説は、北土の三論乃至四論学者の一人として曇鸞を数えるという一般論としてみた場合、別に異論はないのであるが、明道は、吉蔵のいう「北土三論師」の補釈として曇鸞をその始祖とみなしており、その点、後述のように吉蔵の立場からすればいささか無理がある。また『玄談』は、法朗の二大弟子として吉蔵と明勝法師とをあげ、それぞれ南地と北地に三論を弘めた代表者であるといっているが、この「明勝法師」についておそらく明道は興皇寺法朗の遺属を受けた明法師<sup>5)</sup>と、善導が受学した明勝法師<sup>6)</sup>とを混同したものと考えられる。明法師は、法朗亡きあと、江蘇省の南にある茅山派遣の中心地であった茅山に入って、終生山を出なかつたと伝えられている人である。したがって、北地にあって四論を伝えたという事実はないのである。ところが、善導が受学した明勝法師が三論の系統の人であるかどうか不明であるが、法朗の弟子の明法師とは明らかに別人である。したがって、明道の『三論玄義玄談』の説は、すくなくとも、善導の項に関するには間違っているのである。

一般に南地では、中、百、十二門の「三論」を所依とするのに対して、北地ではこれに『大智度論』を加えて「四論」

として弘めたところから、後世の日本では、「三論宗」に対して、いわゆる「四論宗」という呼称を生ずるに至るのである。慧影の『大智度論疏』卷第二十四によると、北魏の道場(8)が、はじめ慧光に就き、のち菩提流支の講説を聞いたが、たまたまその頃に触れ、遁れて嵩高山に入って、十年間『智度論』を読み、のち、鄴都に出でて、盛んに講説をするようになったと述べ、「智度之学の興るは正に此の人にあり」と述べている。道場の活躍した時期は慧光門下の同門、法上(9)（四五―五八〇）の伝に「時人語って曰く、京師の極望は道場、法上なり」とあるところから法上と同時代、すなわち六世紀前半である。すでにこのころは南地においては興皇寺法朗(10)（五〇八―五八一）が盛んに講説を行っていたころであり、時期としては必ずしも早いとはいえない。道綽の『安樂集』卷下には、

謂中国大乘法師流支、三蔵、次有大徳二呵二避名利、則有慧籠法師、次有大徳二尋常敷演每感二聖僧來聴、則有道場法師、次有大徳二和光孤栖二国慕仰、則有曇鸞法師、次有大徳二禅觀独秀、則有大海禪師、次有大徳二聡慧守戒、則有齊朝上統、然前六大徳並是二諦神鏡、斯乃仏法綱維(11)

と記してあり、菩提流支・慧籠・道場・曇鸞と次第しているところを見ると、曇鸞の四論研習は、この道場の学風を受けたものであることが知れよう。

北地における智度論研究の系譜としては道場の門に志念(12)（五三五―六〇八）があり、『智度論』と『雑心論』を十余年弘め、のち晋陽の開義寺、大興国寺等に住して講説し、「先

に大論を挙げ、末に小乗を演べた」といわれる。ついで、北周のとき、静藹(13)（五三四―五七八）は、景法師から『大智度論』を聴き、のち嵩高山に入って経論を攻究し、「大智、中・百・十二門等の四論に於て、最も心を投じて崇む所と為す」と称された四論学者であった。弟子の道判等(14)とともに武帝の破仏に会って、太白山に逃れたが、道判もまた、「中百四論、日夜研尋す」と伝えられている。この北周武帝の破仏に抗して『二教論』を著わした姚の道安(15)も、静藹の門人で、「涅槃経を崇尚して、以て遺訣の教と為し、博く智論に通じて、用

って弘道の基に資す」と称されるように、『涅槃経』と『智度論』に精通し、これが弘通につとめた四論学者であった。そして、この道安の門下に、弘善寺に住して、大論を講じた栄法師(16)と前述の『大智度論疏』二十四巻を著わした慧影が出ているのである。このようにみえてくると、北地の般若学者には「三論」というよりは「四論」、とくに『大智度論』の依用重視ということが、際立った特徴として指摘できるのである。これは南地の三論研究にはあまり見られないもので、北地特有の傾向であるといってもよい。これは吉蔵においても例外でなく、吉蔵は『智度論』に精通しており、彼の教学の

経証的基盤は、『涅槃経』と『智度論』であり、著述中の引用回数でも、常にこの二つが圧倒的に多い。にもかかわらず、吉蔵は、表立っては『三論』を大乘通申の論としてつねに一体とみるのに対し、『智度論』は大乗別論としてむしろこれを除外しているのである。<sup>17)</sup>北地における『智度論』の重視とは明らかにその姿勢を異にしている。

### 三 北土智度論師と北土三論師

では、「北土三論師」という呼称は、このような北地における四論学者もしくは智度論研究者に対する一般的呼称であったかという点、厳密にはそういえないものがある。その理由は、第一に、このことばが、吉蔵に特有のものであるという点、つまり、ちょうど、地論に南道派と北道派の別があったように、三論にも、南地派と北地派という二派が存したという点、文献的にも何も知られないことであるし、吉蔵と同時代人の淨影寺慧遠(五三三―五九二)や智顛(五三八―五九七)その他の祖師方にも、とくに「北土三論師」という表現はないのである。吉蔵においてしか見られないことばであるという点。第二に、その吉蔵においても特殊な場合に限って用いられているということである。つまり、このことばは、吉蔵の数多い著作の中で『中観論疏』においてのみ見出されることばであって、他の著作には皆無なのである。し

たがって、学者が、吉蔵の著作中には随所に「北土三論師云」として三論北地派の説が紹介されているというのは、厳密にはうそである。『中観論疏』中のわずか二三箇所過ぎないのである。しかも、これが曇鸞をも含めて北方に多かつた四論学者や大智度論師に対する一般的呼称であるといえないのは、それとは別に「北土智度論師云」としてこれを引用し、「北土三論師云」という場合と明らかに区別しているからである。<sup>18)</sup>

また『中論疏』のいう「北土智度論師」の場合、他の著作たとえば『大品経義疏』などでは、すべて「北人云」という形で、多数引用せられている。これは『大品般若経』の注解に関する異解を述べたものとして、明らかに、「北土智度論師」の説を述べたものであることが分る。<sup>19)</sup>その他、吉蔵の著作では、しばしば「北土人云」「北土論師云」という用例が見られるが、それらは一般に、北地の大乘論師、すなわち、地論師、撰論師、智度論師等の実在せる諸派の学説を指していると考えられる場合が多い。これに対して、「北土三論師」という呼称は『中論疏』以外には見出されない用法であり、しかも次のような特殊な場合に限って用いられているのである。以下これを列挙してみると、

(A) 二者北立三論師明、此論文有四卷、大明三章、初有四偈、標論大宗、第二從破四縁以下、竟邪見品破執頭宗、第

三最後一偈 推功帰仏、以初撰初、故四偈標宗在於初品、以後撰後、故最後一偈、推功帰仏在後品也<sup>(20)</sup>

(B)復有北土三論師、積此八不、凡有三義、一就空理、積、明畢竟空理、非起非出、是故不生、非終非尽、所以無滅、非定有、二故不常、非定無、故不斷、一相無相、故不一、無差別、故不異、前際空故不來、後際空故不去、第二就緣起事、積、緣合故生、緣離故滅、既生滅、假緣、無有實性生滅、故云不生不滅、因緣起法即因壞果生、因壞故不常、果生故不斷、因果不同、不得言一、無有兩体、不得言異、不從外來、故言不來、因内未、有果故不從内出、第三就对執、積、对於二乘外道執也、薩婆多云、大生生八法、小生生一法、大滅滅八法、小滅滅一法、故云生滅、外道僧佉云、因中有果生、衛世師云、因中無果生、今对破二人生滅、故云不生不滅也、小乘人云、無為是常得道入、無余涅槃、是時五陰都滅、故名斷、外道言、虚空時方微塵等不從因生、故名為常、從因生法、必常歸、尽故名為斷、或言過去有故為常、未來無故為斷、此皆不然、故云不常不斷、小乘人云、諸法同皆無常、是共相故、一、諸法各自相故異、外道云、因果俱有故、一、性別故異、此實不然、故云不一不異、小乘云、未來有法流、入現在名來、後入過去名去、外道云、從微塵世性、梵天等、辺來故名來、復還、歸本、故名去、今破此病、故云不來不出<sup>(21)</sup>

(C)異三論師云、來、應對去、但義相兼、舉來兼去、顯出兼入、欲示破義無窮、故云來出一也<sup>(22)</sup>

(D)有異三論師、謂此是人法相待破<sup>(23)</sup>

(E)又異三論師云、此中破如来、一云、但遺著心、實不破、二云、假令破、破外道小乘之、耳<sup>(24)</sup>

(C)―(E)の「異三論師」というのは、(E)の引用について、安澄が「北土三論師」を指すと註記しているところから、同一人の説の引用とみなされ、「北土三論師」の言い換えと考えられるのでとくに付記した。(C)・(D)については『疏記』の本文が欠落しているのので(E)と同一例かどうか不明であるが、参考までにかかげた。

以上の引用によって知られることは、『中論疏』に引かれる「北土三論師」とはとくに吉蔵と見解を異にしているか、あるいは、当時北方に流布していた、『中論』の注疏を参考として引く場合に限って、これを用いているのである。つまり、特定の北方の三論学者で、明らかに『中論』の注疏者であった誰かを匿名で引いたのが、吉蔵の心証における「北土三論師」であったと考えられる。つまり、このことばは、明道のいうように、四論学者、大智度論師一般を含めて、不特定多数の周延をもつ概念ではなくて、特定の個人に対する狭義の意味しかもっていないことばである、ということである。このような意味で用いられたことばであったからこそ、日本の南都の三論学者の間では、これが具体的に誰であったかということについて種々の論議がなされた訳である。そこで、ふたたび南都の伝承にかえて、この問題を考察することと

する。

#### 四 莊法師の『中論文句』

第一の説は、前項(A)で『中論』の科文に関して吉蔵は具体的な文脈をあげて北土の三論師の説を引用しているが、これを注解した安澄は、一説として『述義』の説を紹介し、これが莊法師『中論文句』の説であるといつてその一節を参照していることである。<sup>(26)</sup>『中論文句』の中論科段に関する文面については、これがただちに吉蔵紹介説と一致するとはいえないが、<sup>(27)</sup>『述義』の著者は、この莊法師を『高僧伝』第七に付載の僧莊であるといひ、この人はかつて『三論義疏』を著わした僧導の弟子で、著書の『中論文句』はこの僧導の義を述べたにすぎないものであるといつている。しかし『高僧伝』には僧莊が荊州の人で、『涅槃』と『毘曇』を善くした学者であり、宋の孝武帝の初(四五二)勅によって京に出たが疾と称して出仕しなかつたと述べているだけである。<sup>(28)</sup>僧莊の伝が付載されている僧徹(三八三—四五二)は廬山慧遠(三三四—四一七)亡き後、荊州五層寺に住しているの、この僧徹とは師承関係があつたかも知れないが、僧莊が京に出た年(四五二)は九十六才で卒した僧導(三六一—四五七)の最晩年でもあり、僧導の義を承けて『中論』に注したとは考えられないことである。とにかく、南都に莊法師所造の『中論文句』が

あつたことは事実であり、内容的には吉蔵の引く北土の三論師の『中論注』と一致するのであるが、その著者に関しては、筆者は『高僧伝』第七の僧莊とは別人の莊法師であると推定する。というのは、『続高僧伝』卷第十四に、慧持(五七四—六四二)という初唐の三論学者の伝があるが、この慧持が、楊都東安寺の莊法師に三論を学び、また高麗の実法師に三論を聴いたと述べている。<sup>(29)</sup>また、卷第十五には、大明法師の弟子の三論学者であつた法敏が、のちに明法師のいる茅山を出て遊学した記録の中に、出でて東安に聴き、また高麗の実公の大乗経論を講ずるを聴いたとある。<sup>(30)</sup>この「出聴東安」とは、前述の東安寺の莊法師の三論を聴いたという意味であろうことは容易に推定されるところである。ところで、吉蔵自身は、『大品経義疏』の中で、「摩訶般若」の「摩訶」の字の解釈にその説を依用している人に同じく「莊法師」という人がいる。<sup>(31)</sup>吉蔵は、この莊法師は彭城の学士で、法朗とは同門の長干寺慧弁の講義を聴いたと称している。とすると、吉蔵のいう「莊法師」とは、『続高僧伝』卷第七所載の道莊(五二五—六〇五)のことである。すなわち

楊州建業人、(中略)初聽彭城寺瓊法師、稟受成実、宗匠師表門学所推、(中略)莊後果鄙小乘、帰崇大法、從興皇法朗聽酌四論、一聞神悟挺慧孤超、後入内道場、時声法鼓、一寺榮望無不預疑、(後略)<sup>(32)</sup>

と伝えられる人で、道宣は興皇法朗から四論を聞いたと称している。のち長安の日嚴寺に住して講説し、大業の初（六〇五）八十一才で洛陽に卒している。吉蔵よりは二十年ばかり先輩であり、彭城系の成実学派から三論へ転じた人として、また吉蔵のいうように長干寺の慧弁に就いた人とする、慧弁は法朗や吉蔵の一派から「中仮師」といつて批判された三論学者であるから、むしろ、吉蔵とは異質な、北土の三論師として紹介される可能性は十分あると考えられる。この道荘が、前述の東安の荘法師と同一人かどうか、にわかに断定できないが、東安寺は楊州にあり、道荘が楊州建業の人であること、また年代的にも一致しており、のちに吉蔵に先立って長安で活躍し、その著も数十巻あったと伝えられるところから、東安荘法師とは道荘であり、荘法師の『中論文句』とは、この道荘の著作だったのではなからうか。もちろん、吉蔵のいう「北土三論師説」が『中論文句』からの引用であるかどうか、次項に述べるように異説があり確定的ではないが、すくなくとも、南都に荘法師著『中論文句』という『中論』の注疏が伝承されていたことだけは確かである。

## 五 琛法師の『中論疏』

南都の見解の第二は、安澄自身の説である。吉蔵疏巻一本に引かれる前記(A)の北土三論師の中論科文に関して、安澄は

『述義』のいう荘法師の『中論文句』からの引用であるという説を否定して、

（今檢琛法師疏第一卷云）然此論大判レ文別有レ三、初有レ四偈一標三論大宗、四縁以下正明三立品解釈、末後一偈明三歸功稽首所以、先標宗者然仏去レ世後、像法衆生各執三異執一有無並起、是以聖者竜樹先開三中道一以為三論宗、若不三先唱三此宗、即不レ明三問答言レ無レ所レ寄、是故第一先標三大宗、然宗本雖レ彰、若不下広引三衆經一遺其執情上者中道不レ顯、是故第二明三立品解釈、但標宗解釈為三論已周、唯須下功推三大聖二顯レ非レ我能上、是故第三明三歸功稽首、若就品而科則有二十七分、但因縁在諸品之初、標宗正建三於論首一以初撰レ初、是故標宗則落三在因縁品、撰三邪見是諸品之末歸功復是造論之終、以後撰レ後、是故歸功即撰三在邪見品、広明如レ彼、（准三此疏文、今云三北土三論師一者琛法師也）

といて琛法師の『中論疏』第一巻を引用して、吉蔵疏がこれに拠ったことを明記し、「今北土の三論師と云うは琛法師なり」と証言している。前記(B)の吉蔵疏巻二末にある北土三論師の「八不釈」の紹介に際しても、同様に琛法師疏を引いてこれを注記している。<sup>(35)</sup> また巻第八本の(E)の「異三論師」の説についても、「是れ応に北土三論師、即ち琛法師等なるべし」と称している。とくに(B)の「八不釈」については前記のように吉蔵疏は長文にわたってこれを引用し、さらに注(34)に見るように安澄もその引用部分の全文を掲載しているので、

これを照合すると、この「八不釈」に関する限り吉蔵のいう北土三論師の説というのは、明らかに、安澄のいう『琛法師疏』に相当する。安澄はこのことを前提していたから、(A)の中論科段に関する引用も『述義』の荘法師『中論文句』という説をしりぞけて、琛法師『中論疏』であると主張したものであると思われる。

そこで、かかる中論疏を著わした琛法師とは具体的に誰かという、安澄は自ら「琛法師とは晉剡東仰山の竺潜、字は法琛、姓は瑯琊の人なり。(中略) 晉寧康二年山館に卒す。春秋八十有九なり」と『高僧伝』を引いてこれを明かし、

「琛法師は是れ中論、百論の疏を作れる師なり。所謂北土の三論師とは是なり<sup>(36)</sup>」と記している。つまり、吉蔵のいう北土の三論師とは『高僧伝』巻第四に記載される法琛<sup>(37)</sup>で、彼の『中論疏』を吉蔵が引いたというのである。ところが、安澄もいうように法琛は晉の寧康二年(三七四)に八十九歳で没している。羅什が『中論』を翻訳したのは弘始十一年(四〇九)であるからこの法琛に中論疏の存在するはずがない。これは明らかに安澄の重大なる過誤である。吉蔵疏には別に羅什以前のいわゆる「六家七宗」の一人として法琛をあげ、その(本無義説)を紹介している所がある<sup>(38)</sup>。或いはそのため不用意にこれを同一視したとも考えられる。しかし、本無家の東晉の竺法琛と、吉蔵のいう中論疏の著者である北土の三論

師とは、吉蔵自身の心証においても全く別人であった。なぜ安澄はこのような初歩的な誤りを犯したのか、また北土三論師説として吉蔵が実際に引用した中論疏の著者は誰なのか。この点を次に考えてみたい。

この問題の解決を示唆する一文が吉蔵の『中観論疏』自体の中に見出される。すなわち、「観法品」第十七の「云何知諸法無我<sup>(39)</sup>」という問に対する答の偈文十二偈の科段に関する見解がそれである。吉蔵疏巻八末に、

次問答如文、偈本関内旧分<sup>(40)</sup>之為三、初五偈明<sup>(41)</sup>声聞稟教得益、次六偈明<sup>(42)</sup>菩薩稟教得益、後一偈明<sup>(43)</sup>緣覚得益、(中略) 近代人云、此是北土瑠師分<sup>(44)</sup>之、蓋不<sup>(45)</sup>遠尋<sup>(46)</sup>古疏、故有<sup>(47)</sup>此謬<sup>(48)</sup>耳、又依<sup>(49)</sup>長行末<sup>(50)</sup>青目自作<sup>(51)</sup>此文、講者宜<sup>(52)</sup>用也

とある。この「観法品」の十二偈の科段は、中国の中論注釈家の間で諸説の紛叫した所である。吉蔵は前文のように最初の五偈を声聞の得益、次の六偈を菩薩の得益、最後の一偈を緣覚の得益のように三つに分けるのであるが、この三分説は、近代、つまり吉蔵と同時代の人々は北土の瑠師の説であると信じていた。それに対し吉蔵は、すでに関内(長安)の羅什教団においてこの分け方がなされており、さらに青目の長行釈にも明らかであるから、この三分説を用うべきであるというのである。ここで吉蔵が、関内の古疏までもち出して自説の権威づけを行なったのは、同処に紹介されている法朗(五〇



八―五八一の五分説をも敢えて採用しなかつたなどの理由もあつたからである。<sup>(41)</sup>しかし、予想されることは、吉蔵が強調するようになどえそれが吉蔵説の典拠ではなくても、世人のいうように北土の瑠師にもまた『中論』の注釈があり、同じように三分説を採用していたということである。さらに、このことを傍証するものとして安澄は、この段に関して吉蔵以後の三論学者である唐代安国寺元康の『中論疏』を引用し、対比している。すなわち、

康疏云、此偈文而諸家不同、扱善斯從、不善斯改、深師最佳、今所<sub>レ</sub>扱用、然取<sub>レ</sub>其意不<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>其言也、十二偈分為三章、初有<sub>レ</sub>三偈、明<sub>レ</sub>小乘觀行<sub>レ</sub>破<sub>レ</sub>大乘所破法<sub>レ</sub>解<sub>レ</sub>聲聞人悟入実相、次有<sub>レ</sub>三偈、明<sub>レ</sub>大乘觀行<sub>レ</sub>破<sub>レ</sub>大乘所破法<sub>レ</sub>解<sub>レ</sub>菩薩人悟入実相、復有<sub>レ</sub>二偈、明<sub>レ</sub>中乘觀行<sub>レ</sub>破<sub>レ</sub>中乘之法<sub>レ</sub>解<sub>レ</sub>緣覺人悟入実相、准<sub>レ</sub>之可<sub>レ</sub>悉<sup>(42)</sup>

といている。元康疏が「最も佳し」といって扱用した深師の説とは、元康は「意を取って言を取らず」として表現を変えてはいるが、内容的には吉蔵疏において一般に北土の瑠師の説と信ぜられていたものと一致する。つまり吉蔵のいう瑠師と元康のいう深師とは同一人物なのである。そこで、次のような仮説が成り立つ。元康疏の原文がどうであったか知るべくもないが、安澄の疏記がこれを引用するに際し、本来元康疏にも瑠師とあつたものを深師の如く誤写したのではなか

ろうか。なぜなら、安澄には北土三論師ハ琛師という先入観があつた。あるいは逆に南都の伝承では瑠師がたまたま深師のように誤写されておつたのではないか。その結果、すでに見たように安澄はこれを東晉の法琛（深）とみなし、前述のような過誤を犯したとも考えられるのである。ちなみに瑠師とは『高僧伝』卷第七<sup>(43)</sup>に記載する法瑠である。現存藏経では法珍となつているが、宋、元、明三本ならびに宮内省本とも法瑠である。現藏経においてさえ、瑠↓珍のように誤記されている。瑠↓琛（深）という誤写は容易にあり得よう。法瑠は長安の東の河東の人で、兗州（山東省）や予州（河南省）に遊学して衆経を貫極し、傍ら異部に通じた。のち東阿（山東省）の静公<sup>(44)</sup>の講義を聴いたが、屢々衆に請われて覆述し、静公は吾も及ばずと嘆じたという。宋の元嘉中（四二四―四五三）江を渡つて南地に至り、浙江省武康の小山寺に住して、首尾十九年、毎歳講を開き、三呉の学者が笈を負うて衢に盈ちたという。『涅槃』『小品』『勝鬘』等の義疏を著わし、吉蔵もこれらを熟知しており、『勝鬘宝窟』や『大乘玄論』『涅槃経遊意』『法華玄論』等の自己の章疏の中でしばしば引用している。また、『大品般若』の義疏を著わした人でもある。『大品旨帰』を著わした東阿の静公に師事しているところからしても、北地にあつたときに『中論』に関する注疏がなかつたとは言ひ切れない。現に吉蔵は北土の瑠師の中論注の存在を示

唆しているのである。いずれにしても推論の域を出ないかも知れないが、吉蔵における「北土三論師」とは、安澄がいう「琛法師」の『中論疏』という具体的な中論注のことであり、決して三論宗北地派の学説一般を指すものではないこと、しかも、琛法師とは安澄のいうように東晉の法琛ではなくて、宋代法瑤を指していると推定されるものである。

(1) 湛然『法華玄義釈籤』卷第十九「江南盛弘成実、河北偏尚毘曇」(大正・三三・九五上)

(2) 同、「故知、南宗初弘成実、後尚三論」

(3) 前田慧雲『三論宗綱要』六三—六四頁参照。

(4) 『統高僧伝』卷第六(大正・五〇・四七〇上)

(5) 『統高僧伝』卷第十五積法敏伝に「入茅山、聽明法師三論、明即興皇之遺属也、(中略)領門人入茅山、終身不出、常弘此論、故興皇之宗、或拳山門之致者是也」(大正・五〇・五三八下)とある明法師である。他に卷第十三慧覺伝(大正・五〇・五二二下)卷第十四慧稜伝(大正・五〇・五三六下)卷第十五慧璿伝(大正・五〇・五三九上)等にも記載されている。

(6) 葵翁『善導大師別伝纂註』卷上に「幼而投密州明勝法師出家誦法華維摩」という『別伝』の一項を註して「明勝者三論宗脈譜云法朗大師有三弟子嘉祥大師明勝法師也」(『浄土宗全書』卷第十六・六頁下)とある。この『纂註』の説明を明道は採用したものとと思われる。

吉蔵と北土三論師(平井)

(7) 慧影『大智度論疏』卷第二十四「自有光律師弟子道法師、後聽留支三藏講説、為被三藏小(小)暝故、入嵩高山十年、誦大智度(中略)智度之興正在此人。」(『続蔵一—一八七—三—二六五右』)

(8) 道場については、『統高僧伝』卷第二十四唐終南山智炬寺積明瞻伝に「乃致書与鄴下大集寺道場法師、令其依撰、專学大論」(大正・五〇・六三二下)とあり、同卷第十一渤海沙門志念伝に「爰至受具、問道鄴都、有道長法師、精通智論、为学者之宗」(大正・五〇八下)とあるを参照。道場と道長が同一人であることは塚本善隆『魏書釈老志の研究』三一—一頁に「音通で同人である」とあるを参照。

(9) (註)7参照。

(10) 『統高僧伝』卷第八法上伝「時人語曰、京師極望、道場法上」(大正・五〇・四八五上)

(11) 道綽『安樂集』卷下(大正・四七・一四中)

(12) 『統高僧伝』卷第十一積志念伝(大正・五〇・五〇八下)なお道場との関係については註(8)参照。

(13) 同、卷第二十三積静藹伝(大正・五〇・六二五下)

(14) 同、卷第十二積道判伝(大正・五一六下)

(15) 同、卷第二十三積道安伝(大正・五〇・六二八上)

(16) 同、卷第二十七積法曠伝に「後聽弘善寺榮師大論、榮即周世道安之弟子也」(大正・五〇・六八三中)とあるによつて、道安の弟子であり、『大智度論』を善くしたことが知らる。

- (17) たとえば『三論玄義』に「問、四論破申云何同異、答三論通破三衆迷、通申三衆教、智度論別破般若之迷、別申般若之教」（大正・四五・一二中）とか、「次論三論通別、以智度論、对三論、則智度論為別論、三論為通論」（一二下）などとあり、『大乘玄論』巻五にも、三論と智度論の異を弁じて、「捉三論望三論、異者有多義、一者文義通別有殊、二者破収之異、文義通別有殊者、若三論即別通論、通申一切諸教、罄無不申、通破一切諸迷、無迷不洗、故是別通論也、若是積論即是通別論、竟致乃復通漫、而的積一部文言、是故名通別論也、二者収破之異者、若是三論望三論、則唯破不収、若積論望三論、亦収亦破、所以然者、三論橫破諸法、堅除五句、（中略）故三論唯破不収也、積論亦破亦収者、破除稟教緣迷、申所述之教也」（大正・四五・七〇下）といっている。
- (18) たとえば『中觀論疏』巻第九末に「次北土智度論師、仏有三身、法身之仏即是真如、真如体非是仏、以能生仏故、故名為仏、如下実相非波若、能生波若、故名波若、報化二身則世諦所攝、故雖有三身、攝唯二諦」（大正・四二・一四〇上）同、一如江南尚禪師、北土講智度論者、用真如是仏」（大正・四二・一四二下）
- (19) たとえば『大品義疏』巻第四「此下二十品、明須菩提説般若、北人就此為二、初一品正命説、第二從初学至無生二十九品受命而説、為三一仏命請説法可言、三仏示其説法可言」（凡・一・一・三八・一・四〇左下）、巻第六「須菩提下第三因レ此述三勤学、北人云、就レ文為レ三、初学三学相、三示学処」（後略）（凡・一・一・三八・一・七七右）等、その用例は多い。
- (20) 『中觀論疏』巻第一本（大正・四二・七下）なお文中「北立三論師」とあるは「北土三論師」の写誤であることは『中觀論疏記』（大正・六五・二〇上）所収の本に照して明らかである。
- (21) 同、巻第二末（大正・四二・三二下）、cf『疏記』（大正・六五・一〇五上）
- (22) 同、巻第三本（大正・四二・四〇中）
- (23) 同、巻第六本（大正・四二・九三中）
- (24) 同、巻第九末（大正・四二・一四〇下）
- (25) 『中觀論疏記』巻第八本「疏又有異三論師云等者、此下第三破異師説以顯旨帰、文中有レ二、初列異師二説、是心北土三論師即琛法師等」（大正・六五・二二二中）
- (26) 同、巻第一本（大正・六五・二〇上—中）
- (27) (一)「標宗分」（標論大宗）(二)「釈宗分」（破邪顕正）(三)「結宗分」（称歎徳）の三分科説をとる点大綱は同じ。
- (28) 『高僧伝』巻第七積僧徹伝（大正・五〇・三七〇下）
- (29) 『続高僧伝』巻第十四積慧持伝「乃聽東安莊法師、又、聽高麗実法師三論、（中略）隋末避難往越州、住弘道寺、常講三論大品涅槃華嚴莊老」（大正・五〇・五三七下）
- (30) 同、巻第十五積法敏伝「入茅山、聽明法師三論、明即與皇遺属（中略）敏採摘精理、出聽東安（中略）又聽高麗

実公講大乘經論」(大正・五〇・五三八下)

- (31) 吉藏『大品經義疏』卷第一「莊法師是彭城學士復聽長干講、而於張舍人宅、發大品經三摩訶云、遊來積大是広博等義、今明、不少不大是広摩訶義」(卍・一・一・三八・一三右下)

(32) 『統高僧伝』卷第九積道莊伝(大正・五〇・四九九下)

(33) 『中觀論疏記』卷第一本(大正・六五・二〇中)

- (34) 同、卷第三末「疏云復有北土三論師等者、此下第二約北土三論師義而為言之、於中有二、初述計、後破此文初也、琛法師疏第一卷云、初云不生不滅者、此偈略作三對一解、第一就空理解、第二就緣起事解、第三對執解、就空理解者、明、法性本空、非起非出不得名生、復非終尽不可名滅、非定有故不得名常、非定無故復不得名斷、一相無相故不可名一、空無差別故不可稱異、實際空故不可說來、後際空故亦不可說出、亦可直言所以不生不滅不常斷者、良以諸法畢竟性空故(言第三就緣起事積等者、次文云)二就緣起事解者、明、法性真空即是因緣深理、理雖無生而衆緣合故名用即生、緣離散復名用即滅、既生滅屬緣、寧有実生実滅、故云不生不滅、次言非常非斷者、然因緣之法則因緣果与因性故非常、果統故非斷、故云不常不斷、次言一異者、明因果不不同不得為一無別兩体不得為異、故云不一不異、次言出來出者、果從因生不從外来、緣中無果不從中出、故云不來不出、此明因緣起法性相如是離於定性、(言第三

吉藏と北土三論師(平井)

- 就对執積等者、次文云)第三对執解者、对於二乘外道情也、薩婆多部云、大生生八法、小生生一法、乃至住滅亦如是、外道人言、從冥初生覺四緣生知、如是等人皆說生滅、今对斯二人所執故云不生不滅、(言小乘人言等者)次言斷常者、小乘人云、三無為是常、得道入無余涅槃、是時五陰都尽、故名為斷、外道人言、虚空微塵時方神等不從因生、故名為常、從因生法必當歸尽、故名為斷、或言、過去有故為常、未來無故為斷、此皆不然、故云不常不斷、(言小乘言等者)次言一異者、小乘人云、諸法同在無常共相故一、諸法各自相故異、外道言因果俱有故一、相別故異、此實不然、故云不一不異、次言來出者、小乘人言、未來有法流入現在、故名為來、現在之法流入過去、故名為出、外道人言、諸法從微塵世性梵王等辺來、後時還歸於本、故名為出、此皆不然、故云不來不出、此明破執頭理、(准此疏文、今云北土三論師者、琛法師也)(大正・六五・一〇五上—中)

(35) 註(26) 参照。

(36) 『中論疏記』卷第三末(大正・六五・九三下)

- (37) 『高僧伝』卷第四積法琛伝(大正・五〇・三四七下)『疏記』には法琛の伝は「高僧伝第三云」とあるも、これは、第四卷の誤りである。また、『高僧伝』には法琛のようになっているが、安澄は「言琛法師者有本作深字」と注し琛と深、或いは琛が容易に混同されることを注意している。

(38) 『中觀論疏』卷第二末「次琛法師云、本無者未有色法、

先有<sub>二</sub>於無<sub>一</sub>故從<sub>レ</sub>無出<sub>レ</sub>有、即無在<sub>二</sub>有先<sub>一</sub>有在<sub>二</sub>無後<sub>一</sub>、故稱<sub>二</sub>本無<sub>一</sub>、此積為<sub>二</sub>肇公不真空論所破<sub>一</sub>」（大正・四二・二九上）

(39) 『中論』卷第三「觀法品」第十七（大正・三〇・二三下）

(40) 『中觀論疏』卷第八末（大正・四二・一二四下—一二五上）

(41) 同処に「一師相承開<sub>レ</sub>之為<sub>レ</sub>五、初一行半明<sub>二</sub>所離<sub>一</sub>、次一行半明<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>無我慧<sub>一</sub>、第三二行明<sub>二</sub>兩種涅槃<sub>一</sub>、第四五行広序<sub>二</sub>仏教<sub>一</sub>、第五二行明<sub>二</sub>乘得益<sub>一</sub>、今明作<sub>レ</sub>此分<sub>レ</sub>之、於<sub>レ</sub>文則乱、宜<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>前意<sub>一</sub>也」（大正・四二・一二五上）とあるを参照。

(42) 『中論疏記』卷第七末（大正・六五・一九四上）

(43) 『高僧伝』卷第七積法瑤伝（大正・五〇・三七四中—下）

(44) 同、卷第七積慧静伝（大正・五〇・三六九中）『大品旨帰』

の著述がある。